王者の安息日 Tab's Holiday

鬼の形相に冷静な目

海老根の生活は空手と共にある。畳の上では三つの顔をのぞかせる。汗を流し、声を張り上げ、真剣勝負を挑む日々の稽古で培ったものとは何か。

取材・文◎高島三幸　写真◎尾関裕士

空手に没頭した7年間

「腰を落とせ！次、左を構えて、下段から、イチ、ニッ、サン！」

緊張感と迫力が漂う千葉県浦安市の体育館。小学生から大人まで、空手着に身を包んだ100人余りの練習生達の真剣な眼差しが、指導者の男へと注がれる。礼和流柳心館空手道連盟の浦安南支部長、海老根宏。不動産業務を中心に建築・設計などの企画コンサルティングを手掛ける、エヌ・ケイ・ワンの社長である。

海老根が空手を始めたのは今から7年前。当時5歳の息子と共に入門した。「やるからには頂点、黒帯を目指したい」と、週4日、休日や会社帰りに道場へ立ち寄る生活が4年間続き、気が付けば、帯は黒色に変わっていた。

柳心館の戦法は、柳のように敵の攻撃をかわし、一瞬の間隙を衝いて攻撃する〝柔〟の空手だ。攻めを重視する〝剛〟の空手は、身体の大きさや強靭さが物を言うが、〝柔〟ならば自分より身体の大きい敵の技でも封じ込める。

「力任せに攻撃しても、無駄な動きが多く、実は力を出し切れない。攻められても動じない冷静な判断力を身に付けることが大切なんです」

稽古が終われば優しい先生に戻る。息子の聖君（左から二人目）や生徒達と

海老根 宏 エヌ・ケイ・ワン社長

1957年茨城県生まれ、48歳。日本大学法学部経営法学科卒業後、父親が経営する日鉱開発（現エヌ・ケイ・リミテッド）に入社し、住宅開発など不動産業務に従事。79年、コンピュータソフトの開発・販売を営むイリイ茨城を設立。86年、事業を拡大すべく単身で新宿に東京支社を構え、89年本社を東京へ移転。同時にエヌ・ケイ・ワンに称号を変更し、同社社長に。昨年、本社を沙留へ移転。不動産事業のIT化を基軸に旅行（ホテル）事業、駐車場事業にも進出中だ。妻、息子の三人暮らし

道場で見せる三つの顔

「勝つためには、冷静な判断力と一瞬の機会を逃さない集中力が必要だ」

稽古で鍛えられた精神は、経営にそのまま応用できるという。海老根は、道場で三つの顔を見せてくれる。

一つは、生徒に型の基本を教える時の厳しい表情。自分と同じレベル、それ以上の相手との組み手を行う顔はさらに険しくなる。二つ目は、鬼の形相だ。「試合とは〝死合い〟を意味する」と言い切り、真剣勝負の場では別人となる。覚悟を持って挑まないと必ず負ける。しかも、ケガをすることにもなるからだ。そして、三つ目が、練習のすべてを終えて子供達と雑談する優しいおじさんの顔。これが本来の海老根の顔である。

19年前、父親の会社の東京支社を起こそうと、たった一人で上京した。新宿の6坪のワンルームからのスタートだった。今は汐留にオフィスを構えるが、海老根はまだまだ満足していない。

「商談というのは、自分より大きな敵に対峙するのと同じ。がむしゃらにぶつかるだけでは上手くいかない。冷静に相手の技を見極め、攻撃に転じる。それが私の必勝法なんです」 V

常に真剣勝負でなければ意味はない